

堅田落し原島旭粧 新撰組一都錦穂 姫百合の塔一栗原雨竹 伽羅の兜一柴田旭堂 西郷隆盛一平井洲誠 常陸丸一仲川秀邦 若き教盛一藤巻旭鴻 掛合勸進帳一石田脩水・長谷川錦舟 盛綱先陣一新部桜水 錦の御旗一須田誠舟 小栗栖一田中旭嶺 白虎隊一前田洲月 彰義隊一古家絃風 安宅一山崎旭萃 艦大和一中谷襲水。

京都琵琶協会 二月一日(土)午後一時会
二月定例茶話会 員矢吹旭美津女史宅。会
員数氏の研究演奏や東京山崎錦幽氏から過日
京絃社に贈られた坂本錦道氏演奏の薩摩琵琶
伴流「謡切」の第一弾法から秘曲第七弾法迄
録音のカセットテープを鑑賞し、三月三十日
開催予定演奏会の各自演奏曲目と出演順の抽
籤を行ったあと附近のレストランで夕食を共
にして散会。尚戸田旭公氏推薦の荒木旭媛女
史入会希望の件につき協議の結果満場一致之
を承認した。(出席者)戸田旭公、田中鵬水、
梅原旭濤、安住旭康、矢吹旭美津、牧雨水、
古谷寛水、峰口高昇、平井春嶺、植村寛水。

NHKテレビ 二月五日夜十時十五
「琵琶のひびき」 分から四十五分間に亘
り「文化展望」として首記が放映され御覧に
なつた方も多しと思ふが丹羽正明氏司会で鶴
田錦史氏が錦心流「壇の浦」の一部を演奏し
た外高木清玄氏の荒神琵琶、井之川氏の平家
琵琶や盲僧琵琶、楽琵琶などがそれぞれ放映

され又平山万佐子女史の各種洋楽器との合奏
や作曲家武満徹、東京芸大小泉文夫教授の琵
琶に関する対談があり最後に鶴田氏の琵琶、
横山勝也氏の尺八で武光氏作曲「エクリプス」
(舞踊加藤よう子)の合奏が放映され冬の永
夜を築きました。

因みにNHKでは毎週木曜日夜八時教育T
Vで駒沢大学水原一教授の「平家物語の世界」
が時に琵琶人の実演も含めて一時間放映され
ているが平家物語には琵琶歌に關係の深い資
料が多く同好者の観聴をおすすめしたい。

(予 告)

- 若手琵琶人第二回演奏会 三月八日(土)夕
東京日本橋第一証券ホール(別項参照)
- 京都琵琶協会定例茶話会 三月九日(日)午
後一時会員平井春嶺氏宅
- 薩摩琵琶四明会物故者追悼演奏会 三月
二十一日(休)正午京都東山安井金比羅宮会館
- 綴水会春季演奏会 三月二十三日(日)一時
大阪天神橋筋朝陽会館(会主広瀬綴水氏)
- 日本琵琶振興会定例研究会 三月二十三
日(日)一時東京新宿洲鳳会館(会主鈴木流泉
氏)
- 晴風会演奏会 三月三十日(日)夕五時東京
杉並区高円寺会館(会主浅野晴風氏)
- 各流派合同演奏会 三月三十日(日)正午京
都東山安井金比羅宮会館(主催京都琵琶協
会)

(訂 正)

○第二四六号「楽理を学びながら合理的に
技を磨きましよう」二頁上段三行目第二絃
は第三絃の誤植。

○第二四八号四頁下段「大姫の悲話を綴ら
せ政略犠牲の夫婦らとむらう声のみながら
」と訂正。尚「現代語で語る津軽琵琶作品
などのお知らせ」の六行目有各詩集は有各
詩吟集の誤り。

あ 梅一輪一輪ずつの暖かさ ●水い冬
が漸く終って梅が咲き桃が咲きやが
て桜が咲くのもそう遠くはあまい
き ●暫く沈滞気味の琵琶界もこれから
が活躍の時機で我が世の春を謳歌するの時
間の問題となった ●然し現代琵琶人の殆どは
演奏するのを単に自分だけの楽しみとし琵琶
樂の発展を望む為の創造意欲に欠けている感
が深い ●本号御執筆の辻旭城先生も此点を苦
慮し皆さまのよいお智恵を期待して居られる
●よいお考えは十円の葉書、二十円の封書の
券をいとわずどしどし本紙上に御発表下さい
●このまゝでは琵琶は亡びる!!

昭和五十年三月一日発行(非売品)
編集者 植村 寛 水
発行所 京 絃 社
高槻市津之江北町一ノ二二三
電話 〇七三六八五六〇五一番
〒569

琵琶 機関紙

京

絃

第二四九号 京 絃 社

我が道を行く六十五年(二四)



西郷 天 風

その時二世為吉氏は、その日本一の仕事を
した親の子として、私も日本一の仕事をせぬ
うちは妻帯しません、と契つた以上、その実
現を見ぬうちはと、初老に近い今日も尚童貞
を守り続けおる次第だが、現在黒鉛の山を持
ち、国家的大機業に貢献しおる日本人はこの
山岸以外一人もおらず、更に「東林グリー
ス」完成の晩は日本一の仕事をしたことにな
るだろう、まあ来年あたりは良き配偶者を得
て父の墓前で報告祭を行う積りだ。

その年の暮も押つまつた三十日の午後だっ
た。私は皇居内に於ける「宮内官の新年宴会
に出演」と云う輝かしき日に、万遺漏なきを
期すべく猛練習の場を閑静な水戸の友人方に
求め、その出発の途上「大民」に立寄つたが、
折悪くサインチ頭の三郎現われ、来客の為め
面会不能とすることに、取り敢えず正月七日頃
迄水戸で練習することの伝言を頼んで上野駅
へと急いだ。

その水戸市北部の街外れに、新屋敷と称す
る梅、松、桜、楓、常盤等の名を冠した「小
路」数条を挟んだ屋敷群があり、その中央通
り「松ノ小路」の中段に、見越しの松のある
門構えが山口の屋敷で、母子三人暮しの気徳
にすぐせるよい家庭だった。

附近は何れも同じ位の一戸建家屋に庭や空
地をめぐらし、少し声高に話せば五、六戸先
まで声の透る静寂さや、線先での日光浴など
格別の楽しみもあり、大晦日の午後には家人
の望みに任せて琵琶の練習を初め元旦も二日
も演奏で送った。ところが三日の昼食後突然
腹痛を覚え、そのまゝ病床で薬餌に親しむ身
となつてしまった。「急性胃腸カタル」だった
が、大事の前とこの必要以上の養生に力
めておると五日の昼頃、水戸第二聯隊の副官
成瀬中尉が馬で馳せ来り、七日の午后将校ク
ラブに於ける将校婦人会新年会に出演の要請
である。病氣中の故を以て断つたが、部隊長
夫人の命をうけて来た副官は真剣な顔つきで

「それしきの病氣何事か」と厳然として聞き
入れず、その軍人堅気の厳しさに負け承諾せ
ずにはすまなかつた。

この二聯隊は水戸市外袴塚より遙か遠方に
あり、聯隊区司令部のある水戸市への入口に
当る新屋敷には将校宿舎も多く、かつて数年
前軍隊慰問以来のファンも多い地域であれば
私の水戸入は忽ち噂となつたであろうし、亦
当時の社会状況から見て、将校婦人達の集
会に琵琶の余興は当然のなり行であつた。

かくて「乃木大将」「両中尉」等三曲はか
り演奏し、帰宿したが病状忽ち悪化し、直ち
に帰京延期と、宮内官新年会期日決定の有無
問合せのハガキを認むる筆もどろどろとたつた。
しかし大民からは何の返信もなく、多分時
節柄多忙の上、期日も例年の如く二十日前後
の為ならんと安易に解釈し、ゆるゆる休養の
上十二、三日頃帰京、その足で大民に立寄つ
た。ところが家人の応待は甚だ冷淡で、山岸
氏に取次ぐ様子もない、予想に反したこの状
態に何やら不吉の感にうたれ乍ら八咫家の店
に飛込んだ。八咫家の主人も亦烈しい口調で
人でなし、といわんばかり、怒気を含んだ顔
には事情を問うすきも見せない、漸くなだめ
て仔細を聞き、その衝撃に私の胸は砕けんば
かり、正に青天の霹靂とはこのことであつた。
新年会は既に済み、肝心の琵琶師は行方不
明というので、折から有楽座に興業中の松旭
斎天勝の奇術を起用して其場はつくろつたも
の、余興係の大場奏任官は職責上切腹にも

備し、琵琶師を推挙した大民主人は、切腹しても尚あきたらぬ程の重大責任を感じ、生涯の希望も絶えて遂に病床に呻吟する悲惨事となっていました。

私としてもこの責任は重い、むしろ私の水戸行がこの不祥事の根源をなしたもので、元兇となるのかも知れぬ。

抑も行方不明とは如何にして起った事情なのか。私が暮の三十日午後、水戸出発の途上「大民」え立寄った折、来客の為め面会不能とのこと、七日迄水戸へ行く伝言をサイヅチ頭の三郎に頼み、正月の三日頃には私からの年賀状が届いた筈、更に八日頃には病気がかゝり予定の日には帰京不能のハガキが届いた筈で、いづれも居所を認めぬことはなかつた。

もし以上二通のハガキが大民主人の手に渡らぬとすれば、それは紛れもなく平素の動作から見て、甚だ異質な性格の小僧サイヅチ頭が思い浮ぶが、既に万事窮すで、精神去脱状態の私は兄を頼って水戸へ戻った。

其頃兄は勤務先日清製粉の宇都宮工場建設終了後、水戸お杉山下の那珂川河岸第二工場建設担当者として既に赴任していた。

新婚間もない兄の家庭に割込んだ私は、悶々の日々を送ること八ヶ月、或日滅多に目を通すことのない新聞の死亡広告欄に、大民洋服店主山岸為吉氏の大形広告を発見したが、只慟哭するのみでなす事を知らなかつた。八月廿四日が命日である (転載厳禁)

二代吉水錦翁

小田原国尊先生を

偲ぶ (六)

東京 坂本 錦道



これより先昭和四十八年十月の末、目黒病院に入院し治療に専念されていた先生は、医師より大体からだも快復したので一応退院してもよいと云われ、十一月月ぶりで帰宅されると云うのである。一年近くも空家同然となっていた先生宅を私は山崎錦幽氏と同道にてこの日朝から出掛けて万端の清掃を終ったのは午後三時頃、先生は大変喜ばれて布団の上で端座、琵琶を手にされ「旅順開城」を中干落し迄演奏、この調子ではもう一度放送も出ると語りだされていた。その後訪問のたびに段々と元氣になられる様子を見て、この分では再起も或は可能であると判断した位である。十一月に入ってから余り寒くならぬ内に先生を連れて、近所の銭湯に入れてあげねばと錦幽氏に云われその氣になり、万事気を配る同氏の心づかいには頭の下がる思いであった。

それから益々寒さに向うにつけ先生の起居が心配であった、区役所福祉課よりヘルパーの派遣もあれど、如何にせん老令の事でもあり、町内会や福祉課の意見では、いくらヘルパーを派遣しているとは云え、夜間老人を一人置く事は余りにも痛々しい事で、福祉行政

上保護収容する事に決し、四十九年一月の末八王寺北方山頂大目に在る設備の整った滝山病院に入院する事になった。二、三日経て私は病院に先生を見舞った時の感想として、先生は「山の水を呑む度にそのうまさ驚く」と云われ、辞去する時私は暖かくなるまで皆さんの御好意に甘んじて、充分お世話になりなさいと申し上げた。

そんなお見舞が二、三回続いて、先生と最後会ったのは三月十四日である。先生は「先日栗原雨竹君が来られたが君からも宣しく云って呉れ」と申され、次に塙二郎氏という方が大正時代より私のファンで、琵琶を弾く人ではないが薩摩琵琶の理解者である、理解者に対する礼儀として名誉錦号を授与するのは少しも不思議でないから、早速免状を持えて贈って呉れ、と。その他二、三件私に対して頼みを申された。私はフト何か遺言めいた先生の話に「先生そんな気の弱い事を云ってはいけません、今私は婦長さんから聞いて来たが、もう少し暖かくなり身体の調子が良ければ二泊三日位の外泊の許可が出るというがこの八王寺から私の府中迄は近いから、私の宅に来てゆっくりして下さい」と云うと、先生も非常に喜ばれ厄介になるよと云われた。それから四月に入ってから四日、私がお見舞に行く予定であったが、四の続く月日に加えて四十九年、如何に無神経の自分でも虫が知らせた、明日にしようと思っていた矢先、病院から先生危篤の電話、早速錦幽氏と同道病院

に急行したが、その時万事休す、既に先生は冷たき亡骸となっていた。

その日の夕方八王寺南方京王線山田駅の山頂に在る雲竜寺に御遺体を運んで安置。翌五日親戚の方々も上京され熱議の結果、何れ日を改めて本葬する事として取あえず密葬し、遺骨は先生が生前古屋に建立してあった墓地に埋葬する事に決定したが、いくら密葬と云っても先生生前親交のあった幾人かの人々に知らせねばと、正統会の辻先生、水藤枝水先生外二、三氏に通知し、その夜は正統会を代表して池野谷吟嶺、古家絃風、大村鼓城の各先生らがお通夜に参加、これに錦道、錦幽を交えて豊前に追悼の一曲宛演奏して御冥福を祈念した。

翌六日午後二時告別式。早朝辻先生焼香に來山、午後には大村鼓城、水藤枝水両先生が來山されてさゝやかな式を営み、水藤先生の情感こもる悲痛な告別の辞が声涙共に述べられて、参列者一様に悲しみの涙を誘った。愁風一しは山頂に低迷、あゝ明治大正昭和の三代に亘りその烈々たる弾風を以て一世を風靡された先生は、悲しい哉、一片の煙と共に昇天された。合掌。

(追記) 二代吉水錦翁の碑は昨年末大阪、名古屋に在任の御親戚の手で、生前小田原先生が用意された墓地、名古屋覚王山の一角に建立された、その碑面には 薩摩琵琶宗家

吉水錦翁の碑

新作琵琶歌作曲「明治天皇」を明治神宮の神前に奉納、録音の上宮中に献納、皇后陛下より有難きお言葉に添えて御紋章入りの品を御下賜給はる

昭和三十四年三月吉日 小田原国尊

と見事を自然石に刻まれてある。小田原先生もって冥すべきと思わる。尚小田原先生の菩提寺は名古屋市熱田区富江町(地下鉄伝馬町附近)浄土宗永観堂派潮音寺にあり。

若手琵琶人の会 (予告) 第二回演奏会

三月八日(土)夕五時半開演 所 東京日本橋三越前 第一証券ホール 入場料 八〇〇円 主催 若手琵琶人の会 後援 日本琵琶楽協会外

- (曲と人) (大楠公)金子旭昭 (鉢の木)清川嵐舟 (井伊大老)城戸旭濤 (川中島)須田誠舟 (羅生門)藤巻旭陽 (天目山)山下晴楓 (茨木)高久穂芳 (伊達政宗)水藤五郎 (唐人お吉)藤巻旭彰 (新曲城郭)晴楓・誠舟・五郎・旭彰・旭昭・旭濤・幸西条歌奈栄・鼓仙波清彦・尺八牧原伸一郎

事務所 東京都中野区大和町一ノ四四 電話(三三八)〇八五五番

狂醉亭漫録 (第百九)

大坂落城異聞 (九)

古谷 竟 水

大阪籠城者中の知名人は大半紹介したが、まだ残りの大野治長と木村重成の略伝を記述する。序に重成の父の木村重茲も併記する。

○大野治長。(一六一一五) 豊臣氏の臣。修理亮と称す。秀吉及び秀頼に仕え、従五位下に叙せらる。慶長四年事に坐して結城に流され、五年秋征東の軍起り結城晴朝ために請いて罪を宥され、福島正則の下にありて戦功あり。のち大阪に往き、淀君に取入り格外の寵を受く。隠謀を企て兵を募り徳川氏と戦い十二月和し、また首謀となり再挙を謀る。元和元年四月城を退いて桜門を過ぐるや刺客のために刺された。五月八日再挙成らず殉死した。

○木村重茲。(一一五九九) 常陸介と称す。豊臣秀次に仕えて、その家宰となり、勢甚だ盛んであったが、文禄四年七月、秀次の事に坐して、秀吉より死を賜い、撰津茨木の大門寺で自殺した。一体この人の事蹟は判然とせず、重茲という名も実は「大日本歴史」に見えるばかりで、「武家事紀」には定光に作り、「古今武家盛衰記」「古今類聚越前国誌」には重高に作り、「撰津志」



には定光に作ってあり、居城もまた越前府中とし、或は山城淀としてあり、更に天正十一年賤ヶ嶽合戦のとき戦功のあった木村隼人この常陸介と同一人としているのもあり又其父として居る者があるという有様である。

○木村重成。(一六一五)

長門守と称す。父は重成。母は豊臣秀頼の乳母右京大夫(実は宮内卿局)。幼より秀頼に仕え慶長十九年大坂冬役には後藤基次と共に東軍の将佐竹義宣と今福に戦ったが、ついに敗れ、翌元和元年夏役には五月六日若江に東軍の将井伊直孝と戦って戦死した。なお重成については、慶長十九年十二月二十二日東西両軍講和の際に、徳川家康の營に赴き、その誓書を請うたところ、家康の血判が鮮明でなかったため、重成はこれを怪しみ、再び家康に請うて血判せしめたという逸話が伝えられている。しかし重成はこの前日秀忠の誓紙請取に岡山の陣營に赴いたことのあるけれども家康の許には京極高次の母常高院及び二位局櫻庭局等が赴いているので、これは全然作り話である。また重成が深慮あって茶道の坊主の侮辱を忍んだとか、秀頼の感状を辞したとか、戦死に備えて食事を慎んだとか、名香を甲に焚き込んだとか、種々の美談があるけれども、何れも如何なる程度まで信すべきか全く不明に属するものである。なお重成の素性についても実に不明なところが多く、重成の子であるということも確実なる材料には見えてをらず、重成の子というのも実は養子であって、実父は別にあるなどという説もある位である。重成の妻は大坂七組の組頭真野豊後守頼包の女で、才色兼備重成の戦場に赴かんとするや、自殺してこれを励ました。時に齡十八であったという事になっている。

以上が世に伝わる木村重成の略伝であるが彼に關する数々の美談は虚説であるらしい。現在も大坂中之島公園の公会堂の東側に南面して木村長門守重成表忠碑がある。之は明治末期の建立で、大坂築城の餘材を用うと銘文にあり、碑面及び碑陰の銘は当時の書道大家日下部鳴鶴の一代の傑作であるが、重成は賢明で才子型ではあったが、世に伝えられるが如き誠忠の士ではなかった。諸書を綜合して想像するに、重成は小柄で色白く鼻筋通り、睫毛長く瞳に艶あり、丹花の唇美しい好男子であった。その昔一見した本朝男色考なる写本によると、彼は当時の代表的ゲイボーイで所謂色若衆であった。十四、五歳の頃から大坂城内の知名の豪傑連や荒武者達から、城内の徒然から關係を迫られ、就中当時五十半の織田有楽斎までが其一人であったという。

而も後年淀君の乱行激甚になるや、怪しからぬ事に有楽斎が彼女に重成を取持ってから城を脱出したという事である。事実淀君は最期まで重成を離さず、彼が若江出陣の前日淀君に別離の挨拶に登城の際、首途の宴を開いて彼を大酔させ、城内に泊めて終夜離さず、重成は翌朝気分朦朧のまま出陣し、若江堤の露と散ったという事で、重成夫人の自刃も夫

を勇氣付ける為ではなく自棄的な心境であつたらしく伽羅の兜の美談も大分怪しくなる。猶重成の年令は判らず廿二、三歳と推定する。さて豊臣氏滅亡の末期的症状の一たる淀君乱行という不浄の筆を本意乍ら弄する順序であるが、秀吉在世中の彼女は天下人の寵姫であり、やがて征夷大將軍たるべき秀頼の御母公であり、昔の尼將軍政子の権勢をも凌いだ、秀吉薨去の後には未だ三十歳の若後家の身で完全に独裁者となり驕慢の振舞多く我儘の限りを尽した。淀君の風手は小柄色白で肌光沢あり、細面で中高、眼は涼しく鈴を張り一文字の唇は氣位の強さを示し威厳あり且つ艶麗の面ざしで、胸は豊満胴細く腰から大腿は太り肉でその下は次第に細り足首は一握り程で、代表的な美人の典型で、晩年でも三十歳位の若さを保った。

秀吉在世中から年令差の為欲求不満に陥り、石田三成に次で大野治長と不倫の關係に入り、秀頼は治長の胤であるとの通説は前段既に述べたが、秀吉が生前多くの婦女と公然と關係した如く淀君も公然と同様の事をした。然し当初は控え目であったが次第に激しくなり、東西手切れとなってからは政事向の面白からぬ事等には心を昂ぶらせ、四十女の不満も加わり所謂ヒステリーを起し、最後には精神分裂の症状で暴れ狂ったとある。此様な場合突如性感神経の昇進からか、相手を求め一瞬の恍惚状態に凡てを忘れ去る事を唯一の慰めとした様で、日夜閨房の快樂に耽溺したのだ。

彼女の好みは二十二、三歳位の若侍に絞られ治長の嫡男信濃守治徳、秀頼の乳兄弟内藤新十郎春忠、小姓頭伊藤美作守長弘、又最後の木村長門守重成等は知名人だが、其他は殿中で垣間見た若侍でも恰好良ければお気に入り此の時分から淀君の男狩りは始まった。彼女のそれは普通ではなく、女が男を玩弄する一方的なものであったが、指摘された若侍は御母公様の側近に侍るは家門の誉れ身の冥加と心得て精根を尽して奉仕したのである。

(以下次号)



私の音楽 水藤五郎

音楽とは

長い間休筆をいたしておりました。二年前前に「音楽史の争点」と題して数度拙文を記しましたが、諸用に追われ追われて、休筆をさめこんで今日に至ってしまつた次第であります。此の度昭和五十年を迎え、思いを新たに休筆の汚名を晴らすべく、この貴重な紙面をわずらわそうと意を決しました。勿論私の一文など全く取るに足らぬものではあります、本紙に執筆されている諸師の御年令の高さを考え、多少なりとも紙面の平均年令を下げる事に役立つのも一興と考えて、あえ

て筆を取つた次第であります。

たゞ此の度は、話を音楽史とせず、身近な話題とするつもりであります。それは何故かと申しますと、いやいやそれはいづれゆつくりお話することにいたしまして、今日は一冊の本を御紹介することから始めてまいりたいと思ひます。

その本の名は「私の音楽談義」と云う本です。作者は芥川也寸志、この人については既に多くの方々は御承知でしょうから解説はしないことに致します。強いて付け加えるならば作曲家、そして芥川龍之介氏の三男であり先年亡くなった俳優芥川比呂志氏の実弟であります。私はこの本を、ふと池袋の書店の隅で見つけました。そこは大きな店内の片隅で「音楽書コーナー」と札が下がっているところでした。私は買ひ可きかどうか迷ひ、或る意味では半信半疑で買ひ求めました。

早速帰路の車中で読みました。大して期待してはなかつたこの本が、実に愉快で楽しい内容なのです。私はおもしろさのあまり、三百頁にあまるその本を、一気に読み終えてしまいました。読み終えた後、私はとてもさわやかな心でありました。その本から、芥川氏の音楽への愛情の深さと、その支えとなつて

いる人間のやさしさ、豊かな音楽経験と、更に加えて文筆の巧妙さを感じることが出来ました。私は、この本からいろいろな事を学び取ることが出来ました。是非おすすすめしたい本です。発行は音楽の友社、定価は七百八

十円と書き添えておきます。

この様に私はこの本を良い本と考えたのですが、何故、多くの人がこれを読んでいないのだろうかとは疑問を抱きました。しかしそれは直ぐに解決されたのでした。最後の頁の「おくり」を見てそれが判つたのです。昭和三十四年初版、四十八年一月第十五版とそこには記されておりました。なる程、多くの音楽ファンがこの本を読んでいたのです。つまり隠れた、ベストセラーであったのです。私の不見識から出た疑問でありました。

この本の中で、作者は音楽とは如何なるものであるか、どのような態度で接すべきかを記しています。「ひっぱり出す音楽」と云う一章の中で一人はよく「音楽を如何に生活に結びつけるか、その方法を教えて下さい」と私にたずねます。しかし私は「音楽とは生活の中から生まれるものであって、生活と別のところに在って、それを生活に結びつけ様と考えるのはナンセンスだと思つています」と答えようとしますが、あえてそれは答えないで、たゞ黙つて話をそらせます。なぜなら、音楽を理解し得ない人々は、私のこの考えを到底理解しないでしょうから……と記しています。

私はこの一文に大意を私なりに記してみたのですから、異存のある方は原本に接することを望みます。この考えに極めて心深く感じるものを抱きました。たしかにそうなのです、私たちの生活の中から生まれるもの、そ

それが音楽なのです。つまり真の音楽なのです。人から与えられたり、儀礼的な音楽、それは心の通わない音楽なのです。我々は、「音楽の三要素」とよく云います。これが欠けるものは音楽とは云えぬと説明されます。しかし乍ら、それ以前に大切なことは、私たちの生活の中に在ると云うことが何よりも大切なことなのです。どんなに立派な楽曲であっても私たちの生活の遠くに在るもの、無理におしつけられたりするものは音楽とは言えないのであります。たとえその形式が、不備で、幼稚なものであっても、生活の中から生まれ出た音楽が、真の音楽でありましょう。

琵琶は音楽ではない等と、よく論評されることがありました。いや今日でもそう思っている人もあります。特に西洋音楽のみが音楽と考えている人には、まゝあることです。そしてたしかに、形式的には、楽曲的には単純で、未熟で、つまらないものかもしれない。しかしそれは西洋音楽から見てもそう思うのであって、私たちの生活の中に、白虎隊や西郷隆盛や、勝海舟や、平敦盛等を思う心がある限り、それを語り、それを弾じる琵琶は立派な音楽であるのです。私たちは自信をもって、この音楽を後世に残すべきなのではないかと思つています。「自信をもつ可き」と私のノートに記すことにしました。



斜陽化する琵琶将来のありかた

辻 旭城

弾法「ツンテントン、チチリチリントン、トチチン、チンチリントン……」は筑前琵琶の初歩流しの手であるが、我が国では遠く神代の頃から音楽が存在し、庶民達は琵琶に、琴に、三味線に、その妙音に陶醉して現代まで伝えられている。

人間には生まれると共に健全なる神の恵みによって耳が備わり、その働きの結果を感じし、知覚する能力が与えられている、ということが、述べんとする歌の実体と絃の神秘を論ずる上に欠くことが出来ないものと思われ。若し地上で音が無いとすれば、耳の存在の意味は全く無くなってしまふ。即ち聴覚は人間を始めあらゆる動物に無用のものとなるだろう。又音が存在していて人類や動物に耳が無いならば、これ又現在我々の知覚する音とは全く別な存在として、音を感じたかも知れない。

要するに音とか耳とかは、それ自体単に波動であり量子であつて、之を定量的に測る事が出来るけれども、是等が一たび耳に入り聴神経に刺戟を与えて以後の問題になると、必ずしも定量的に測り得ないような現象が多く

なつて来る。即ち心理的な問題は全く主観的であつて、只実験的統計によつて漸く客観性を保ち得る程度である。

然るに、世に伝えられる多くの音楽現象を眺めるに、現代の歌謡曲に反し明治から大正初期頃にかけての曲目、絃譜は甚だ多い。それはよいとしても琵琶歌を奏する場合、歌そのものに昔の儘の作詞が取入れられて現代の若者達に判断する能力が不足している結果が生じ、又絃に於ても歌と調子とが一定しない不可能性が、演奏会などで見られる事は否定出来ない。戦乱によつて食糧や経済的な問題、爆撃を受けて大切な琵琶器は焼失し、名器の入手困難から練習不足を生じ、今日の大衆から敬遠されるようになった。

此問題は単に琵琶ばかりでなく琴、尺八、謡曲、浪曲、浄るり、長唄など伝統芸術の悩みの種となつて居て、再興をはかる研究が各方面でもなされているが、残念ながら未だ究極の名案を見ないようである。この儘で行けば古典芸能は消滅するだろう。

筆者もこの問題に就ては以前から相当の研究と努力を続け、絃友石橋旭嶺とも話合つて来たものであるが、今は第一線から引退して好きな茶道に余生を楽しまれる山本旭城先生も、「琵琶の世界にはまだ多くの問題が残されている、総ての点に於て現代に適應するようにならなければ、我々の時代を限りで減びてしまふだろう」と次ぎのように云われている。(1) 毎日一時間から二時間ぐらい余暇を利用

して、正しい歌と絃の撓捌きを何回となく行ふ。

- (2) 会員達は一ヶ月中の日を定めて研究会を催し、意見や疑問について話合う。
 - (3) 時代に適應した新曲の編曲。
 - (4) 音譜の簡易化と歌曲の短縮。
 - (5) 公開演奏会を出来る限り数多くして、都会よりも農山村に重点を置く。
- 以上によつて琵琶の普及を計り、庶民達に親しんで貰いたいと思うが、賢明なる諸先生方の御批判とお力添えを京絃紙上に賜らば幸甚である。

結婚式の歌



早川 織水 作詞
植村 冥水 節付

- (謡出) 高砂や この浦船の入潮に
- (中干) 帆を春風のもどけしや
- (チ) 天に千年の鶴舞えは
- (切) 地に万年の龜遊ぶ
- (大干) めでたき今日の景色かな
- (中干) こゝに尾上の松あれば
- (中干) かしこに神も住の江の
- 松あり千重の波越えて
- 妹背のちぎり深ければ

相生とこそは名づけたれ

(吟替チ) 琴瑟の声 住の江の

- (チ) 浜の松原波寄せて
- 女波男波の織る糸も
- 十重に二十重に契るなる
- (止) 今日のこと永久にこそ
- えにしのこと永久にこそ

大石神社に於て 十二月十四日朝十時か
義士祭演奏会 京都山科の大石神社社会館で大阪琵琶同好会の協賛による奉納演奏会があり赤穂義士の霊を慰め参詣者を喜ばせた。
白虎隊：中山嬢水 別れの盃：宮之原聖水
松の廊下：辻旭城 赤垣源蔵：石橋旭嶺 神崎与五郎勤忍袋：光旭仙 大石主税：田中敷水 義士の本懐：寺尾旭吉栄 田村邸：美登里緑水 雪晴れ：中山鳳水。

武絃会。一水会多摩支部 一月十九日昼

合同 新年 研修会 一時小金井市福祉会館。城山：石井效水 川中島：中島爆水 鉢の木：清水環水 竜の口：中村修水 羅生門：落合白水 彰義隊：伊藤馨水 薄陽江：高杉洲靖 茨木：加藤錦陽 母常盤：村木桜柳 松崎：坂本錦道、以上順演の後新年懇親宴に移り八時閉会した。

日本芸術琵琶 一月十九日昼一時から東
柏会 一月例会 京新宿柏ビル兩宮会長宅。
お江戸日本橋、門琵琶、伴流第七弾法謡切の連弾：山崎錦幽を序奏に本能寺：関口修水
坂崎出羽守：青木晴城 勳進帳掛合：富樫長谷川錦舟、并慶石田脩水 黒田武士：山崎錦幽 石童丸：杉山旗水、以上演奏のあと小宴を開き七時散会。尚当日若宮旭登、日原錦桜山本隆水諸氏は支障のため欠席された。

大阪琵琶同好会 一月十九日午後三時か
新年 宴会 大阪天王寺区上六の近鉄会館「あすか」で開催。まづ安宅の関：松本旭勇 若き敦盛：大村旭令 山吹の夢：伊藤旭堂 誉れの水馬：水谷旭甫 伊豆の御難：田中敷水 壇の浦：石橋旭嶺 月に偲ぶ：辻旭城 神崎与五郎：光旭仙 羅生門：寺尾旭吉栄 西郷隆盛：作花旭友各氏順演の外詩吟剣舞や美妓の三味線で民謡仕舞等隠し芸が続出して盛況裡に六時過ぎ解散した。

琵琶 東京新聞・日本琵琶楽協会共催。
名流大会 「新春邦楽名流演奏会」琵琶部の会が一月二十四日昼一時から東京日本橋三越劇場で開催され東西各流派名手揃いの出演で極めて盛況裡に終始した(五〇〇円)。
壇の浦：岡田旭連 春日野：清川嵐舟 紅葉狩：広瀬翠紅 大楠公：友吉鶴心 鉢の木：遠藤鶴東 都落：押川旭葉 船并慶：島田春水 うつぼ猿：水藤五郎 本能寺：平井春嶺